

留学生のライティングに対する ビリーフ調査作成に向けて

長谷川 哲 子

1. はじめに

大学や大学院で学ぶ留学生にとってアカデミック・ライティングは不可欠のスキルであり、レポートや論文等のプロダクトは、教員や査読者などの評価者による評価を必ず受ける。アカデミック・ライティングにおいて、高い評価を得るプロダクトとはどのようなものかを明らかにするためには、まず、評価者の評価のしかたを把握する必要がある。

本研究の着想として、まず、評価者は留学生の作文にどのような評価を与えるのかという点がある。長谷川・堤（2007a, 2007b）では、大学教員が留学生の書いた意見文に対してどのような評価を与えるのかを調査した。調査結果からは、大学教員において、日本語教員（日本語教育を主に担当している教員）と専門教員（学部専門科目に相当する科目を主に担当している教員）との間に、評価内容の大きな差は見られなかったが、文法面の正確さよりも内容や構成の面が重視されることが検証された。

その一方で、ピア・レスポンスのような協働的な活動をライティング作業に取り入れた授業活動¹⁾も広まりつつある。ピア活動においては、受講者は書く側、評価

1) 具体的な活動内容については、大島弥生・池田玲子・大場理恵子・加納なおみ・高橋淑郎・岩田夏穂（2014）『ピアで学ぶ大学生の日本語表現 プロセス重視のレポート作成 [第2版]』等

する側相互の立場に立つ必要があることから、留学生自身が留学生の書いた意見文をどのように評価するのかを知るため、長谷川（2008）では留学生の意見文に対する留学生の評価を調査した。これは、長谷川・堤（2007a, 2007b）における大学教員の意見文評価調査に用いた意見文資料から2点を選定し、この2つを留学生38名に評価させ、どちらの作文が高評価であるか比較してもらい、その判定理由を自由記述形式で回答してもらったものである。その結果、教員と同様の評価を示した者とそうでない者には着目点の差が見られた。具体的には、教員が低い評価を与えた方の意見文を高く評価した者は、文体や列挙表現のような形式的で部分的な側面に対して肯定的にコメントしている。一方、この側面については、教員は高い評価を与えてはいない。このことは、教員と留学生、また評価者と被評価者との間に、どのような作文がよい作文であるかという評価観に乖離が存することを示唆するものである。

そこで、長谷川（2008）で得られた留学生の判定理由コメントに基づき、留学生と教員のそれぞれの評価が異なっている要因は、書き手自身のライティングに対するビリーフにあるのではないかと推測し、今回の調査を行った。この調査はライティングに関するビリーフ調査項目策定に向けた基礎的資料を得ることが目的である。本稿は、調査結果の分析と考察、および、本格的なライティングのビリーフ調査実施に向けた知見の報告である。

2. 先行研究

留学生のライティングをめぐる、文章の論理構成の分析、留学生の書いた作文に見られる誤用の分析、ライティング指導法の実践等、多様な分野における先行研究がある。

日本語教育におけるビリーフ研究では、ライティング等の特定のスキルに特化したビリーフ調査は、管見の限り、十全な段階には至っていないものの、ライティン

を参照されたい。

グやそのビリーフに関して着目すべき先行研究が散見される。

まず、大学院レベルの研究留学生を対象とした専門日本語ライティング教育に関する研究として、村岡（2011）がある。村岡（2011）では、「論文スキーマ²⁾」形成における成功者・未成功者の間に文章評価の視点に差があることを紹介している。「内容・構成」「段落や文の接続における論理展開」「表現・文体」の3つの視点のうち、「未成功者は「内容・構成」と「論理展開」についてはコメントができず、「表現」レベルにかなり偏っていた」（ibid.: 88）と指摘している。これは、上述の長谷川（2008）の調査におけるコメント内容と同様の傾向を示すものである。

次に、日本語学習者のライティングに関するビリーフ調査研究の概要を以下に述べる。

作文授業におけるピア・レスポンスに対する中国人日本語学習者のビリーフ研究として、田中（2005）が挙げられる。田中（2005）では、ピア・レスポンスを導入した作文授業の受講者によるコメントを分析しており、ピア・レスポンス活動に対する肯定的、否定的双方のビリーフが挙げられている。

ライティングに対するビリーフ調査を実施した研究としては、石橋（2006, 2009）がある。石橋の一連の研究では、国内の日本語予備教育の日本語学習者を対象とした調査から文章産出に関する言語活動項目を抽出し、調査項目を作成している。石橋（2006）は、その調査項目の中からビリーフとされる項目を分析対象としたものである。その結果、日本語学習者は「主題の明確さの必要性」「構成の重要性」「読みとの関連の重視」といったビリーフを強く持っていること、および、文章産出に関する学習者ビリーフの因子として「メタ認知の重要性」「外部リソース活用の有用性」「母語作文力との関連」があることを指摘している。さらに、石橋（2009）では、石橋（2006）で使用された質問調査票を用い、タイの大学の日本語専攻学生を対象とした作文産出に関するビリーフおよびストラテジー調査を行っている。この調査結果から、「正確さ志向」「メタ認知志向」「アイディアの精緻化志向」「ピア協働志向」「作文産出に対する困難意識」「表記に対する意識」を

2) 「論文スキーマ」とは、「研究や論文とは何かの概念知識の総体」である。（村岡 2011：84）

ビリーフおよびストラテジーの6因子として解釈している。これらの調査は、日本語学習者のライティングに関するビリーフ研究における本格的な調査の嚆矢と位置づけられるが、調査対象者が限定されており、日本語学習者のライティングに対するビリーフ研究の一環として、JSL環境下でアカデミック・ライティング能力を本格的に運用していく必要がある日本国内の留学生を対象としたビリーフの解明が必要である。本研究は、先述の先行研究を受けて、ビリーフ調査項目の充実、ひいてはライティングに関するビリーフ調査研究を進展させる端緒とするものである。

3. 調査の概要

本調査では、ライティングに関するビリーフ調査の項目策定に向けた基礎的資料を得ることを調査目的とした。調査対象は、日本語または日本語教育に関連する分野を専攻とする大学院生（調査実施時（2012年度）の所属）20名とした。大学院生を調査対象としたのは、大学院生の場合は自らがアカデミック・ライティング能力を高度に求められる立場にあり、その一方で、アカデミック・ライティングのプロダクトへのピア評価を行う立場にもある可能性が高いと考えられるためである。調査方法には、PAC分析の手法を一部援用した。³⁾ 自由連想の連想刺激として、留学生が日本語で作文を書くとき重要だと思うこと、作文で高い評価を得るために注意すべき点、作文を評価する際に注目する点を尋ねた。

4. 調査結果および考察

以下では、今回の調査結果の分析と考察を述べる。本稿で述べる調査結果においては、調査対象者として回答の得られた20名中、調査方法に適合した18名分の回答を分析対象とする。最初に、調査結果全般を通じて特徴的な回答について考察

3) 今回の調査では、PAC分析を援用するにあたり「PAC分析支援ツール」(<http://www.kanazawa-it.ac.jp/~tsuchida/lecture/pac-assist.htm>)を利用した。

する（4-1.）。次に、調査結果について日本語母語話者回答者と日本語非母語話者回答者に分けた考察を試みる（4-2.）。

4-1. 調査結果と分析①

以下では、上述の自由連想の連想刺激により得られた連想間の類似度評定に基づくデンドログラムをもとに考察を行う。

今回の調査では内容、構成、正確さ等、従来のライティング指導において重視されてきた項目が得られた一方で、読み手への意識、オリジナリティー、テキストタイプ、文体等、先行研究でのライティング関連のビリーフ調査では含まれていなかった項目が回答として挙げられた。下記（1）に調査結果の分析の結果、抽出された主な項目⁴⁾を列挙する。

- （1）内容、テーマ、構成、伝達性（伝えたいことが伝わっているか）、オリジナリティー（独創性）、（内容の）一貫性、説得性、当事者性（具体例や自分の経験を書いているか）、読み手への意識（共感を得られるかどうか）、論理性、インパクト（おもしろさ、魅力）、冗長さ、表記、語彙、正確さ、接続詞、体裁、文体、テキストタイプ（ジャンル）、修辞法、剽窃に関する意識（引用の仕方、コピー & ペースト）、参考資料

上記（1）のうち「内容」に関わる項目としては、「オリジナリティー（独創性）」「（内容の）一貫性」「説得性」「当事者性」「インパクト」が挙げられる。これらの項目のうち、

- （2）「オリジナリティー（独創性）」「当事者性」「インパクト」

4) 上記の項目の一部について、回答者からの回答内容に基づいて、指している内容の補足を（ ）内に記しておく。

については、長谷川・堤（2012）で分析資料とした意見文のレベルであれば、特にこれらの項目での秀逸さがなくとも合格点に達するようなある程度の点数は獲得できるのではないだろうか。いわば、間違っていないが無難、おもしろみには欠ける、という印象の作文である。しかし、アカデミック・ライティングのレベルでは、上記（2）が特に重要なものとなる。上記（2）のような項目は、読み手を引きつけたり、読み手に理解されるように自らの独創的な説を提示したりすることを必要とされる際に着目されるものであり、このような項目は、読み手である評価者の視点を意識したものではないだろうか。今回の調査で特に（2）のような項目が得られたのは、調査対象である大学院生が、学生としてレポートや論文を執筆し、それを評価される立場であると同時に、研究者として学術論文を批判的に評価したり、チューターや日本語教員として学習者の作文を評価したりするという立場にもあるということが背景にあると考えられる。

その一方で、日本語学習者としてこれまで書き手の立場にしか立ったことがない場合には、評価者の視点に立つことが難しく、こうした項目への意識を持ち合わせにくいこと、また、高評価を得られるようなプロダクトの産出が困難となる可能性が示唆される。

さらに、上記（2）の項目に着目しながら、今回の調査結果について、「正確さ」と「内容・構成」という観点から先行研究における知見と比較してみる。

「正確さ」について見てみると、石橋（2006, 2009）では、例えば「構成」については「作文は構成が大切である」のようなビリーフ項目が設定されているが、先述のように、石橋（2006）では文章産出に関して「主題の明確さの必要性」「構成の重要性」「読みとの関連の重視」などのビリーフを日本語学習者は強く持っていることと結論づけている。これらは正確に、適切に書くためのスキルや能力に関するものであると思われる。一般に、プロフィシェンシー研究（鎌田・山内・堤（編）（2009）他）では、文法的に誤りがない、適切な言語形式を用いて文章を構成できる能力を「正確さ（accuracy）」とみなす。この考えを援用すれば、石橋（2006）が明らかにしたことは、日本語学習者は文章産出に関して、文法的な誤用がないという文法的正

確さに加えて、適切な文章構成を保った「広義」の正確さが必要であるというビリーフを持っていることであると考えられる。

また、「正確さ」に関して、長谷川・堤（2012）では、高い評価を得る作文について、文法的正確さのみでは高評価が得られず、評価においては内容・構成が重視されるということを検証した。文法的正確さのみをもって高い評価を得ることができないという点について、例えば小論文の執筆において、論文内での引用のマナーが適切である、論文としての体裁が整っているなどの、「広義」の正確さのみを備えていても、それだけではその論文そのものに高い評価が与えられるとは考えにくい。そのため、文法的正確さのみでは高評価を得られないという長谷川・堤（2012）における指摘は、「広義」の正確さに含まれる項目にも妥当するのではないだろうか。

他方、「内容・構成」に関しては、長谷川・堤（2012）では、作文評価においては「内容・構成」が重視されるということを検証したが、今回の調査結果と合わせて考えてみると、その「内容・構成」における質として、上記（2）のような項目に見られるように、論理的一貫性に加えて、読み手や評価者の要求を満たすような要素が求められていることが示される。

以上の先行研究をふまえ、今回の調査結果に敷衍させて得られた「正確さ」と「内容・構成」に関するとらえかたを、下表のようにまとめておく。

表1 「正確さ」と「内容・構成」

	正確さ	内容・構成
長谷川・堤（2012）	文法的正確さ …文法面の誤用がない	設問に対して過不足のない内容 …論理的一貫性
長谷川・堤（2014）	“広義の” 正確さ …文法的正確さ、引用、体裁、 テキストタイプ	読み手の要求・欲求を満たす内容 …独創性、インパクト

さらに、上記（1）で挙げた項目に関して、「読み手への意識」も、得られた項目

として着目すべきものである。今回は「読み手への意識」として項目化したがる、具体的には「読み手を共感させることができるかどうか」「読み手を説得できるかどうか」「読み手への配慮がなされているか」「専門家ではない読者に理解できる内容になっているのか」という記述が回答として得られている。これらの観点は、読み手を評価者と位置づけ、さらにその評価者の立場から自らのプロダクトをもう一度とらえ直すという俯瞰的な視点を要求するものである。この観点がビリーフとして保持されているかどうかは、上述の「読み手の要求・欲求を満たす内容」の産出に関わると考えられる。

最後に、「剽窃に関する意識」について述べておく。教員や評価者側にとっては至極自明のことであるが、アカデミック・ライティングの緒についたばかりの学習者にとっては、強調しすぎてもしすぎることはないものである。剽窃はいわばマナーに関するものであり、上手下手や読みやすさには直接的な影響を与えにくいと思われるが、評価に際してはきわめて重要である。特に、大学院留学生において、こうした観点がビリーフとして保持されているかどうかは学府で研究に携わる一員として重視されるべきものであると考える。

ここまで、今回の調査で得られた項目について、先行研究においては特筆されていなかった項目を中心に取り上げた。調査結果として抽出できた項目はいずれもアカデミック・ライティング能力の向上に向けて重要かつ欠かせないものばかりであり、日本語学習者のライティングに対するビリーフ調査作成に資する結果が得られたものと考えられる。

4-2. 調査結果と分析②

今回の調査では、有効回答が得られた回答者18名のうち、日本語母語話者が10名、日本語非母語話者が8名であった。そこで、回答者の母語による傾向差を検討するための試行として、以下では回答者を日本語母語話者と日本語非母語話者に分けて、分析および考察を行う。回答の分析にあたっては、テキストマイニングツールのKH Coderを使用した。

については、日本語母語話者と日本語非母語話者の間にある程度共通点があると言える。

その一方で、日本語母語話者と日本語非母語話者の回答には、差が見られるか、差があるとすればどのようなものかを見るために、以下では、両者の回答を再度分析してみる。

まず、出現語リスト、共起ネットワークを参考にしながら、表2のようにコーディングルールを作成した。

表2 コーディングルール

*正確さ	正確 or 正しく or 正しい or 正確さ or 正しさ or 間違い or 誤り or 適切 or 使い方 or 的確 or 引用 or 明確 or 明瞭
*内容	おもしろい or 納得 or 説得力 or 意見 or 内容 or 理論 or 客観性 or メッセージ性 or 着眼点 or 独創性 or 豊か or オリジナリティ
*表記・文体	表記 or 文体 or 句読点 or 話し言葉 or 書き言葉 or 丁寧
*論理・構成	論理性 or 一貫性 or 構成 or 客観性 or 段落 or 論理的 or 客観的 or 整合性 or 裏付ける
*読み手配慮	読み手 or 意識 or 配慮 or 読者
*品詞・文法・語彙	接続詞 or 助詞 or 類義語 or 副詞 or 単語 or 漢字 or 主語 or 修飾語

上掲のコーディングルールを用いた集計結果を日本語母語話者と日本語非母語話者に分けて表3に示す。

表3 コーディングルールによる集計結果

	*正確さ	*内容	*表記・ 文体	*論理・ 構成	*読み手 配慮	*品詞・ 文法・語彙	ケース数
NS	25 (20.66%)	18 (14.88%)	11 (9.09%)	15 (12.40%)	2 (1.65%)	11 (9.09%)	121
NNS	11 (12.50%)	18 (20.45%)	3 (3.41%)	9 (10.23%)	4 (4.55%)	7 (7.95%)	88
合計	36 (17.22%)	36 (17.22%)	14 (6.70%)	24 (11.48%)	6 (2.87%)	18 (8.61%)	209

(表中の「NS」は日本語母語話者、「NNS」は日本語非母語話者を指す)

表3の結果からは、全体として正確さと内容のコードの頻度が最大であることが分かるが、日本語母語話者と日本語非母語話者の結果にはどのような差が見られるだろうか。この点について、上記のコーディング「正確さ」「内容」「表記・文体」「論理・構成」「読み手配慮」「品詞・文法・語彙」について、クラスター分析をすると、下の図2に示されるように、二つのクラスターにわかれた。そこで、それぞれのクラスターを新たに「内容(2)」（「論理・構成」「内容」「読み手配慮」から成るクラスター）と「正確さ(2)」（「表記・文体」「正確さ」「品詞・文法・語彙」から成るクラスター）にわけて再度コーディングルール（コーディングルール(2)）を作成した。

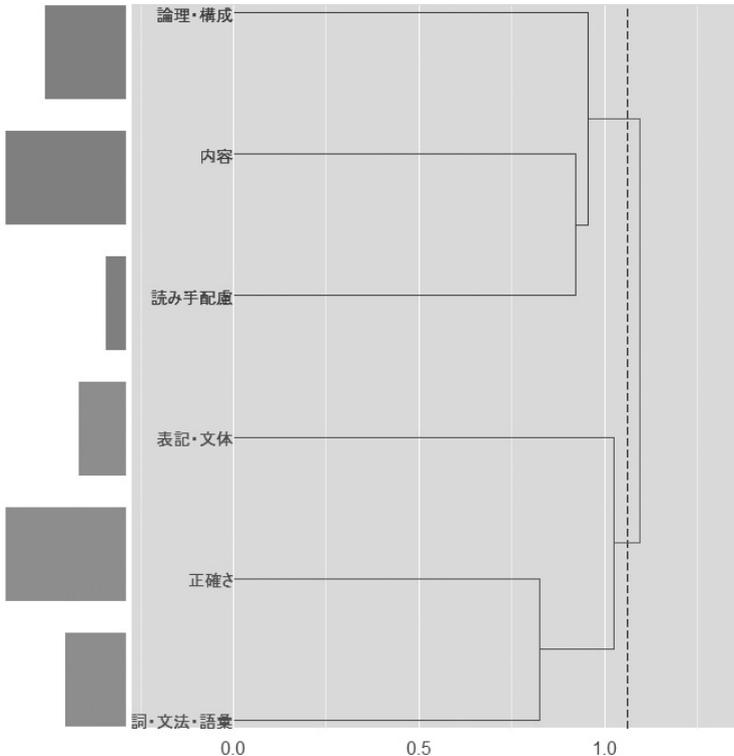


図2 「内容(2)」「正確さ(2)」のクラスター

このようにして得られた「内容 (2)」「正確さ (2)」の頻度を比較してみると、次の表4のような結果となった。

表4 コーディングルール (2) による集計結果

	*内容 (2)	*正確さ (2)	ケース数
NS	31 (25.62%)	42 (34.71%)	121
NNS	28 (31.82%)	16 (18.18%)	88
合計	59 (28.23%)	58 (27.75%)	209
カイ2乗値	0.684	6.142*	

(自由度1)

表4に示す「内容 (2)」「正確さ (2)」それぞれの出現頻度を、カイ2乗検定を用いて検定した結果、有意差が認められた ($p < 0.05$)。このことから、今回の調査回答者全体において、留学生の作文執筆において重要な点、高評価を得る作文を書くための注意点、作文評価の際の注目点として、日本語母語話者回答者は日本語非母語話者回答者に比べて、正確さの要素を重視する傾向が明らかになった。

このような傾向は、留学生の執筆した作文評価においては文法的正確さよりも内容や構成のほうが重視されるという長谷川・堤 (2012) の検証結果とは一致しないものである。今回の調査と長谷川・堤 (2012) の調査では、調査そのものや調査結果の分析手法等が大幅に異なっているため、単純な比較は無用であるが、「正確さ」「内容」「構成」といった要素は、作文評価を行うにあたっては、ごく一般的な項目である。今回の調査結果と先行研究での知見との比較を通じて、作文評価における基本的な項目の重要度を決定する要因、または重要度の程度に影響を与える要因は何なのかという点を、ライティングのビリーフ調査の作成にあたって考慮しておく必要が示唆された。

5. まとめと今後の課題

本稿では、ライティングに対するビリーフ調査の前段階として行った調査結果とその分析および考察を述べた。その結果から、ライティングのビリーフ調査項目として、読み手や評価者の視点を取り入れた項目の必要性が指摘できる。また、今回の調査結果を通じて、作文執筆や作文評価において重要視する項目について先行研究とは異なる傾向が見られたことにより、今後の調査計画の精緻化が課題となった。さらに、ライティングのビリーフ調査研究と並行して、ライティングのビリーフとプロダクトとの関連等、より大規模な調査を必要とする課題があるが、現段階ではその構想を述べるまでには至っていない。全て今後の課題としたい。

参考文献

- 石橋玲子（2006）「日本語学習者の文章産出に関する beliefs」『茨城大学留学生センター紀要』4.1-11.
- 石橋玲子（2009）「日本語学習者の作文産出に対するビリーフとストラテジーの特性——タイの大学生の場合——」『国際交流基金バンコク日本文化センター日本語教育紀要』6.23-32.
- 鎌田修・山内博之・堤良一（編）（2009）『プロフィシェンシーと日本語教育』ひつじ書房.
- 田中信之（2005）「中国人学習者を対象としたピア・レスポンス——ビリーフ調査をもとに——」『日本語教育』126.144-153.
- 長谷川哲子（2008）「日本語学習者による非母語話者の作文に対する評価について」『大阪産業大学論集 人文・社会科学編』4.1-10.
- 長谷川哲子・堤良一（2007a）「「分かりやすさ」を決める要因は何か？——どのような文章が分かりやすいと評価されるか——」『2006年度日本語教育学会第10回研究集会予稿集』65-68.
- 長谷川哲子・堤良一（2007b）「大学教員による非母語話者作文への評価について」『第9回専門日本語教育学会研究討論会 発表要旨集』18-19.
- 長谷川哲子・堤良一（2012）「意見文の分かりやすさを決めるのは何か？——大学教員による作文評価を通じて——」『関西学院大学日本語教育センター紀要』1.7-18.
- 長谷川哲子・堤良一（2014）「留学生のライティングに対するビリーフ調査項目策定に向け

た調査について』『2013年度日本語教育学会第10回研究集会予稿集』74-77.

村岡貴子(2011)「研究留学生のための専門日本語ライティング教育の可能性」『日本語学習支援の構築——言語教育・コーパス・システム開発——』仁科喜久子(監修)、鎌田美千子・曹紅筌・歌代崇史・村岡貴子(著). 77-90. 凡人社.

【謝辞】

今回の調査結果の分析にあたり、デンドログラム作成にあたっては秋田大学の佐々木良造氏、KH Corder による分析にあたっては金沢大学の松田真希子氏に多大なるご助力を賜りました。ここに記し、あらためて深謝いたします。

【付記】

本研究は、科学研究費助成基盤研究(C)(研究課題番号:2152055)の成果の一部である。